

私の目からみた大垣俊一さん

和田恵次

孤高の研究者がこの世を去った。潮間帯の貝類を主たる研究材料として、その生態学的研究、保全生物学的研究を通して海岸の保全活動に大きな足跡を残した無類の海洋生物学者である。大垣さんは、地道にデータを集め、それをまとめ上げては、きちんとした論文に完成させるという模範的研究者であるだけでなく、その研究成果を活かした社会的活動、つまり海の保全に関する活動を積極的に進めるとともに、自身の研究に基づいた科学論の展開までも進めた。それらの活動は、いままさに大きく完成しようとしていただけに、道半ばの死は、彼にとって無念でならなかったであろう。

彼が研究を始めたのは、ちょうど京都大学理学部4回生のとき、瀬戸臨海実験所において、課題研究として田辺湾の動物プランクトン群集をテーマにしたときであろう。当時、瀬戸臨海実験所の大学院生として在籍していた私は、彼を車に乗せて一緒に野外調査に連れて行ったときのことをよく覚えている。車の中で、彼は、研究は如何にあるべきかを、私に問いかけ、そして自分の考えを渾々と語っていた。その後、京都大学の大学院生となってからは、岩礁潮間帯上縁部に生息するアラレタマキビの垂直分布を主たるテーマにした研究を行い、人並み外れた地道なデータ収集と解析から、これらの仕事を着実に論文化し、これをベースに理学博士の学位を取得した。彼の論文をいくつも読ませてもらい、私自身は大いに勉強させられた思いであった。

大垣さんは、瀬戸臨海実験所に在籍中、京都大学が管理している田辺湾の畠島の海岸生物相のモニタリングに強い興味を示し、瀬戸臨海実験所の時岡隆教授が始めた畠島の生物相調査を積極的に引き継ぐこととなる。私も、この調査に彼から誘いを受けて協力することになるが、そのとき彼は、京都大学が保有する島の海岸生物をモニタリングすることの重要性を強く訴えていたのを思い出す。個々の地域における生物相の長期的様態は、その地域の環境変動の大きな指標となるものであり、保全上極めて意義深く、価値あるものでありながら、当時そのような海岸生物の長期モニタリングを行うところはどこもなかったのである。大垣さんは、この長期モニタリングは、人の年齢を越えても続けることが重要として、モニタリングする人が変わっても継続できる体制づくりこそ重要とした。そして1984年から1990年にかけて、畠島の海岸生物相変遷に関する報文を立て続けに発表することとなる。この姿勢は、瀬戸臨海実験所地先にある番所崎での貝類相調査にも引き継がれ、この長期的研究も、彼は見事に論文にまとめ上げ、海岸生物の長期モニタリングのもつ意義を内外に知らしめることとなる。潮間帯貝類群集のモニタリングは、同時に生物地

理学的研究への展開にもなった。紀伊半島の沿岸域を、バイクを乗り回してはデータを集められた岩礁潮間帯の貝類相調査からは、紀伊半島沿岸のもつ生物地理学的特徴を、定量的データに基づいて明らかにした初めての研究として高く評価されるものとなっている。

一方で大垣さんは、白浜以外の地でも、研究を進め、それをまた論文にしている。北海道沿岸や小笠原諸島沿岸でのタマキビ類の分布、沖縄でのタマキビ類の分布と垂直移動に関する研究、さらにはマングローブ湿地の巻貝類の生物地理など、亜寒帯から熱帯までを網羅した研究を行っていた。いわば1つの地域の長期的な継続研究とは対極を成す研究であるが、その面でも実効ある研究を進めたと言えよう。

以上のような個別的な研究とは別に、大垣さんの科学観、科学論が、アルゴノート誌上で展開されてきた。研究の進め方、研究の価値観など、彼自身の考えが示され、私にとっては、ひとつの大きな啓蒙書となっている

大垣さんの著作の中で、私が最も教訓を受けたものとして、1983年に「技術と人間」の5月号に掲載された「高知県下のダムと河口海域の漁業被害」を上げたい。これは、ダムのある河川の河口海域の漁業資源の低下を具体的な資料に基づいて検証したものであり、川と海の連環がいかに重要であるかを、具体的なデータで示すものとなっている。河川上流域のダムによる改変が、海の環境を大きく変えること、それは、最近になってやっと河川工学の方面から明らかにされるようになったが、海の生物に直結した影響が示されたのはまだほとんどない。河川と海の結びつきの重要性は、最近になってホットな研究課題となっはいるが、1983年という時点で、既にその重要性を具体例でもって示した大垣さんの卓見には、頭が下がる思いである。

最後に、私にとって最も頭に残っている大垣さんが残した言葉で拙文を閉めたい。

「生物を研究材料にしている者が、その生物の保全のための活動に時間を割くのは、人が生きるために必ず食事をする時間をとらないといけないのと同じように、生活の中で必須とされるべきものである。」

合掌

(わだ けいじ・奈良女子大学理学部)